

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

くわばら きねお
桑原甲子雄 (1913-2007) は、1931 年に東京市立第二中学校 (現：都立上野高校) を卒業し、家業の質屋を手伝います。幼馴染の田中雅夫、濱谷浩兄弟の影響で写真をはじめ、『アサヒカメラ』『フォトタイムス』などの月例を通して腕を磨きました。年度賞を得た『カメラアート』では、1937 年 2 月号で個人特集が組まれるなど、有望アマチュアとして注目を集めました。

戦後は米兵向け DPE 業や、『フォトアート』の前身である『写真撮影叢書』の編集に携わったのち、1948 年に『CAMERA』編集長に就任しました。桑原は月例審査をプロ写真家に依頼し、後に土門拳と木村伊兵衛が担当したことで、同誌は「リアリズム写真運動」の中心となりました。

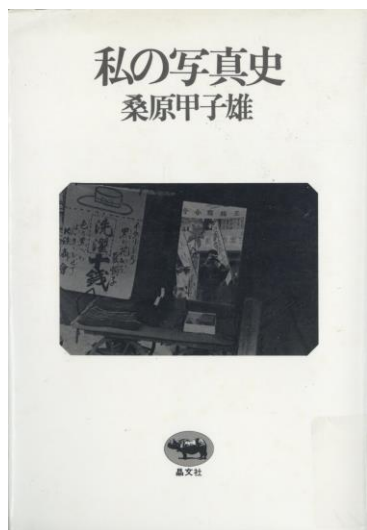


『サンケイカメラ』創刊号

1954 年 5 月には、産業経済新聞社が創刊した『サンケイカメラ』編集長に就任し、同誌が 1959 年に東京中日新聞社へ移って『カメラ芸術』と改題した後も 1964 年 12 月号で休刊するまで携わりました。翌年にフリーとなり、評論活動と写真撮影を再開します。その一環として『季刊写真映像』(写真評論社・1969 年～)、『写真批評』(東京総合写真専門学校出版局・1973 年～)と写真評論を主題にした雑誌の編集長をつとめました。

また 1970 年代には、写真展出品をきっかけとして 1930～40 年代に撮影した作品が評価され、『東京昭和十一年』、『満洲昭和十五年』(晶文社・1974 年)、『一銭五厘たちの横丁』(同・1975 年)、『夢の町 桑原甲子雄東京写真集』(同・1977 年)などにまとめています。

代表的な著書に、『私の写真史』(晶文社・1976 年)があります。本書は、桑原が写真をはじめたきっかけから、1930 年代に意識せず写真へ深入りしていったいきさつ、『カメラ』編集長就任までについて『写真批評』で連載したものを主体としています。そのほかに、編集者として写真に係わるなかで、テレビの出現による「映像」「イメージ」という分野から写真の全体像を考え直すことを動機として書いた雑誌・新聞への寄稿および写真集解説文などで構成しています。



『私の写真史』

その後は、写真雑誌各誌で精力的に連載を持ちます。『カメラ毎日』では 1980 年 1 月号から翌年 12 月号まで「自写自評」「桑原甲子雄のメカニズム探検」を寄稿しました。後者は桑原が自選したカメラ・レンズについて記し、未知の機材に対する好奇心が強く現れた内容です。『アサヒカメラ』では、雑誌記事と関係者の対談および自身の印象を基にした「物語昭和写真史」を 1985 年 1 月号から翌年 12 月号まで 23 回連載しました。『日本カメラ』では、1978 年 1 月号から展評、時評、雑誌評、連載など、1995 年 12 月号まで実に 20 年近くにわたり執筆を続けました。